

雪ノ下陽乃が、よく眠れますように

ナス科の地上絵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

わたし、比企谷 八幡！8月8日生まれのA型！

座右の銘は、「押してダメなら諦めろ」！

どこにでもいる普通の大学院生！

なのに突然魔王が襲来してきて、毎日のように振り回されることに!??

これからわたし、どうなっちゃうの？

【重要】

この話は原作12巻の内容を含まずに書かれています。

(書いてる人が未だ読んでいないため)

もしかすると話の内容が原作と矛盾が出るかもしれませんが、ご了承下さい。

※自分の書き方は稚拙ですがこの話の元になっている、中村航さんの「僕の好きな人が、よく眠れますように」はとても素敵な話なので、是非読んでいただけたらと思います。

目次

prologue / 0話 / 再会	1
1話 / 疑問	5
2話 / 一歩	11
3話 / その時彼は、彼女は。	15
4話 / もう一つの再会	20

prologue / 0 話 / 再会

高校を卒業した後、俺は故郷である千葉から離れ、北海道にあるとある大学へと進学した。

俺は現在、その大学の研究チームに所属している。

俺が愛する千葉を離れたことには理由があるのだが、それを人に言いふらす趣味は無いので今の所は割愛させてもらう。

…あ、そもそもそんな事話すような友達も知り合いもいなかったわ。

まあそんな訳で大学でも安定のぼっちである俺は、当然留年などするはずもなく、そのまますんなりと大学院へと進み、研究室へと入った。

大学お約束の恋愛騒動は当然、ない。

つまりオカルト研究部に入ってこよみちゃんとホーンテッドなキャンパスラブコメをする事も当然なく、ただ研究をして、古びたアパートに帰って、アニメを見て、大学へ行って、研究をして、帰る。

その繰り返しの日々だ。

そんな中、ゲスト研究員が千葉からやって来ると聞いた。

しかも噂で聞く限り相当の美人だそうだ。

まあ、研究室でも最低限の会話しかせず、ぼっちを貫ぬいているこの俺にはあまり関係の無い話だろう。

この時の俺は、そう思っていた。

そうして、ゲスト研究員がやって来る日になった。

その人物は、研究室の全員と教授に、お土産の千葉ミルクフィークと、何故かMAXコーヒーをくれた。

マッ缶を持つてくるとは。

流石は千葉県民、分かっているな。

珍しく仲良くなれそうだ。

そのセンスある千葉県民のゲスト研究員を見る。

視界で、艶のあるセミロングの黒髪が揺れた。

「…ありや？…比企谷くんだけ？」

◇◇◇
簡潔に言おう。

…ゲスト研究員として千葉から魔王がやってきた。間違えた。あねのんこと雪ノ下陽乃がやってきた。

彼女はこの春、雪ノ下宅という名の魔界から出ると、我が愛しのカントリー千葉から、ライト兄弟が発明した人類の翼、立体機動…じゃない飛行機に乗って飛び立ち、東北の山々を飛び越えて新千歳空港へと降り立ったのだ。

そして――

「…比企谷くん？…話聞いてる？」

「…ちゃんと聞いてますよ」

現在俺は、陽乃さんと大衆居酒屋に居る。

2人だけで。もう一度言っておく。2人だけで。

……どうしてこうなった。

落ち着け、深呼吸だ。ヒツヒツフー。

「ぶぷっ！落ち着きなよ比企谷くん、それラマーズ法だよ」

し、知ってるし！わざとだし!!？

「誰の所為だと思ってるんですか」

うわぁこの人楽しそうだなーと思いつつ責める様に目を向ける。もちろんそんな視線をしてもこの人には効かないってことは知ってる。

でもね、八幡はそういう素振りをキチンと見せることが大事だと思うの。日本の政治家にも見習ってほしいレベル。

…まあこの人には無意味だけど。

「つれないなー。私は愛しの比企谷くんと2人で飲みたいなあーって言ったただだよ？」

「そうですね、言いましたね。よりによって歓迎会の最中に」

しかも一言一句違わずにそのセリフを。

独身男性陣からの視線が辛かったです。まる。

明日のこと考えると今から頭痛い…。

「まあまあ、今はそんなこと置いといてさ、おねーさんに積もる話とか無いの?」

「無いすね。じゃあ俺はコレで失れたたたたたた!!?」

「何コレ!?腕ってこんな方向に曲がるのん!?」

「あるよね?」

「ニコニコしてるのに眼だけが一切笑ってない…」

「ふええ…この人怖いよう…」

「わか、わかりました!わかったので離して下さい!」

「よろしい」

お許しの言葉と共に腕が解放される。

「べ、別に俺の大学生活なんて面白いことなんか無いですよ、布団と俺のラブストーリー聞きたいですか?」

「噛んだ…恥ずかしい。」

「田山花袋じゃないんだから…つまんないな」

「や、さすがに本とか書いたりしないっすよ…」

俺には彼の文豪の様に自分の性癖曝け出すなんて羞恥プレイは無理だ。

現代であんな話書いたら黒歴史じゃ済まないだろ…

お巡りさんコイツです!なんて御免です!

ぶーぶーと文句を言う陽乃さんを無視して梅酒の入ったコップを傾ける。

い、言っておくが照れ隠しじゃないからな!

「そういえば、北海道で大晦日にクマが玄関にアラマキジャケ置いてってくれるんだって?」

唐突に陽乃さんが話しかけてくる。

…と言うか…なにそれ。

「…いや、なんすかそれ。初耳ですよ。少なくとも俺のそこには来てないですね。そのクマ兵十にでも撃たれたんじゃないですか?」

「あはっ…ごんぎつねだね?その返しは嫌いじゃないけど兵中も同じ間違いはしないんじゃないかな?」

「そっすか、まあ俺は要らないですけど」

例えシャケをくれるとしても俺は会いたくない。

本州のツキノワグマなら兎も角、北海道はヒグマだからな。

シャケの代わりにタマ取られたんじゃ割に合わない。

「代わりに美人のおねーさんがやって来てあげたよ？あつ、これ陽乃的にポイント高い？」

「ヒグマの方がマシですね。あと小町の真似はやめて下さい。俺がホームシックになったらどうするんですか」

いつも思うんだけどその謎のポイント制度なんなの？貯めると何か貰えるの？

「うわあ…相変わらずのシスコンだねえ」

その苦笑した表情に違和感を覚える。

「…どうかしたんですか？」

「…何がかな？」

が、その違和感も一瞬で、すぐにいつも通りの強化外骨格が装着される。

まあ聞かれたくない内容なら無理に聞く必要もないだろう。

「いえ、俺の勘違いみたいですね」

「…うん。そうだよ」

何故か、そう答えた時の彼女の表情が頭にこびり付いて離れなかった。

1 話／疑問

午後10時。

一次会の後別れた他のメンバー達もそろそろ帰宅し始めている頃だろう。

つい、と先程から喋らない陽乃さんを見る。

彼女は、アルコールのせいか少しぼんやりとした目をして此方を見た。

…色っぽいんでやめて下さい。

「ねえ、比企谷くん。私さ、この研究が終わったら結婚するんだ」

「…は？」

いきなり何を言い出すんだこの人は。

疑問を視線に乗せて陽乃さんにぶつけてみるが、彼女はニコニコと相変わらぬ強化外骨格を浮かべるだけだ。

この人が、結婚？

何と言うのが正解なのか、分からない。

いや、普通は、おめでとうございます、と言うのだろう。それは知っている。

でもこの人の場合はそれでいいのだろうか。

「そうですか」？「式には呼んでください」？

どちらも間違っている…気がする。

ああ、そもそも何で俺がこんなに考えなくちゃいけない。

「…そんな急にフラグたてられても困ります。アツバース朝滅ぼしちゃうんですか？それとも雪ノ下家は建築会社だから一級フラグ建築士、とかいう高尚なギャグなんすか？」

頭に浮かんだ中で一番くだらない言葉を口にする。

こんなことを言う俺は普通では無いのだろう。

だかしかし（タイトルじゃない）普通では無いのだ。彼女も。

「あはっ！あははははは！さ、さすが比企谷くん！私の想像の遙か斜め上に行く回答だったよ！もう比企谷くん大好き！」

「大好きとかやめて下さい。うっかり惚れてしまったらどうしてくれ

るんですか」

「酷いなー比企谷くん。これは私の本音だよー？」

いや待て、この人の事だ。また面倒くさい何かに巻き込まれるのだから。

え？深読みしすぎだつて？

俺を誰だと思ってるんだ？比企谷さんだぜ？（ドヤア）

「そりやどうも。で、なんですか。それで終わりじゃ無いでしょう？」

「…え？別に何も無いけど？」

素のきよとんとした顔で返されてしまった。

畜生可愛いじゃねえか。

…し、死にたい。トレンディな天使の真似してドヤ顔とか、黒歴史がまた一つ増えてしまった。

「…でも本当に、フラグがたつてくれたら良いのにね」

「え？何か言いました？」

「ん？何でも無いよ？」

俺は難聴主人公じゃない。

あんな訳分からないとところで急に耳が遠くなったりするなんて断じてない。

「キスしてもいい？」を「キムチでもいい？」に聞き間違えたりもしない。

ただ、内心悶えていたせいで陽乃さんが何か言っていたのを聞き逃してしまっただけだ。

まあ何でもないと言うのなら何でも無いのだろう。

ただ一つ。一つだけ聞きたいのは――

「陽乃さん、結婚、したいんですか？」

「……………」

返事がない。

ただの陽乃のようだ。

いや、え？本当に返事がないよ！！？

あるえ？もしかして無視されてる？

顔を上げて陽乃さんの方を見ると、珍しくぼかんとした表情の陽乃

さんがいた。

「…どうかしましたか?」

「あ、いや、つつこむ所が分からなくて、ね」
つつこむだなんて、はしたない!

女の子がそんなこと言っちゃいけません!

「…比企谷くん、それは流石に引くよ?」

「すいませんでした」

陽乃さんのマインドリーディングは健在でした。まる。

…ほんと何で分かるの?

「で、そんなに俺変なこと言いました?」

「いやだつてさ、比企谷くんが自発的に私の名前呼ぶなんて初めてじゃない?」

そうだったか?

脳内ではいつもこっちの方で読んでるから違和感は無いんだが。

「すいませんでした雪ノs」

「陽乃」

「雪ノ」

「陽乃」

「y」

「陽乃」

まだ何も言っていないんですがねえ…。

仕方が無い…これでいいのか?

「…陽乃?」

すると陽乃さんは一瞬目を見開いて、その後満足げに、

「…陽乃」

……………。

そして流れる沈黙。いやナニコレ。

何とも言えない雰囲気になった所で携帯が鳴る。

そしてその音源はなんと俺の携帯だった。

メールのようだ。

…おい今そこで驚いた奴、怒らないから手を挙げなさい?

いや自分で『なんと俺の携帯だった』とか言っちゃった俺も俺だけ
ど。

すみません、と陽乃さんに言っただけメールを確認する。
なにになに…？

差出人：一色いろは

件名：やばいです先輩

本文『戸塚先輩がインカレに出場しました！先輩、よろしければ応
援一緒に行きませんか？』…だつてさ。一色ちゃんってあの時の生徒
会長ちゃんでしょ？いやー比企谷くんも隅に置けないなあ』

すぐ側で聞こえた声に思わず仰け反ると、陽乃さんがすぐ横から覗
き込んでいた。

「ち、違いますよ。そもそも最近は一色のやつ、戸塚といることが多い
らしいですし」

そう、戸塚と。

…あれ？一色に対してなんか黒い気持ちか。

これが…嫉妬？

「間違つてないかもしれないけど色々間違つてるよ比企谷くん…」

「人の心を読むのはやめて下さい」

返信を書く。

件名：Re. やばいです先輩

本文：悪いな戸塚の試合を見れないのは非常に、非常に残念だが俺
は応援に行けなさそうだ。戸塚の応援、俺の分も含めて応援頼む。

…できたらテニスしてる戸塚の写真も頼む。いや、絶対頼む。

これでよし、と。送信。

…つてもう返信？いろはすどんな速度でメール打つてんだよ。
マジっべー。いろはすっべーわ。

件名：Re Re. やばいです先輩

本文：なんですかとつかさんをりゆうにわたしとあいたいきもちを
めいっばいにひょうげんしてるんですかしようじきおつけーって
いたいきもちでいっばいですけどいませんぱいとあそんじやうとだ
いがくのかだいとかてにつかなくなりそうなのでなんかもうもうす

こしまっていてくださいごめんなさい

…漢字に変換してないじゃねえか。読みにくい。

まあいいか。どうせ振られてんだろうし、ちゃんと読まなくても。

「…なんで告白してもいないのに振られなくちやいけねえんだよ…」

すると、その言葉を聞いた陽乃さんが言った。

「振られたのは、本当に比企谷くんかしら」

「…いやどう考えても俺でしょう。酔ってるんですか?」

相変わらずニコニコしながら陽乃さんは続ける。

「振られたのは、一色ちゃんじゃないかしら」

「陽乃さん?お水貰いましょうか?」

本当に酔っているのだろうか。

だいたい何をどう考えたら一色がフラれた事になるんだよ…

「…まあそれでいいや。あくまでもフラれたのは比企谷くんだと、そう言うのね?」

いつの間にやら陽乃さんの笑顔が何か含みのあるものになっていった。

この人笑顔の種類多すぎやしませんか?

「当たり前じゃないですか」

「じゃあ、フラれて傷心の比企谷くんをおねーさんが慰めてあげよう!」

「丁重にお断りします」

「丁重に断られた!?」

ガハマさん流ツツコミですか。

そうなんですか。

どうでもいいけど今日の陽乃さんキャラぶれすぎじゃないか?…
どうでもよくはないか。

確かにいつも行動が読めない人ではあったけれど…

強化外骨格は前と変わらないように思えるのに、行動に違和感がある。

無理にテンションを上げようとして失敗している感じに似てるな
…ソースは中学の時の俺。

…というか。

「陽乃さん、さっきの質問、答えてないですよね」

「…さっきのって?」

陽乃さんは手に持ったコップに目を向けたまま、聞いてくる。

「分かってて言ってますよね。なら、もう一度聞きます——」

陽乃さんは、結婚、したいんですか？

2話／一歩

『ねえ、比企谷くん、私さ、この研究が終わったら結婚するんだ』

——私は何を言っているんだろう。

こんなことを言うつもりはなかった。

比企谷くんだって急にこんな死亡フラグめいた事を言われても困るだろう。

：ほら、『何言ってるのこの人？』って眼で見してきた。

でも、ごめんね。

お姉さんはその問いには答えられないよ。

だって答えを知らないから。

ああ、思わずにはいられない。

私は、なんて事をなんて人に言ってしまったんだろう、と。

——比企谷くんなら、きつと気付いてしまうのに。そして、気付かれたら、私は、わたしは多分、戻れなくなる。

「——陽乃さんは結婚、したいんですか？」

思った通りだった。

私は今、追い込まれている。

それも三つも年下の、男の子に。

「結婚したくない女の子なんていないよ？ほら、静ちゃんが部活の顧問だった比企谷くんなら分かるでしょ？」

「平塚先生の話はやめてあげて下さいよ……」

うん、ごめんね静ちゃん。

本当にごめん。今度婚活パーティー見つけてきてあげるから許して。

脳内静ちゃんにめちやくちや謝り倒す。

まあこれで誤魔化せたっぽいし、静ちゃんに感謝かな？

「で？陽乃さん、どうなんですか？……さっきみたいにやり過ぎせると思わないでくださいね」

……………。

う——ん。やっぱりだめかあ。

静ちゃんたら使えないんだから。

謂れない誹りを受けている静ちゃんはまあ置いておいて、本当にどうしよう…この状況。

ああ、なんでそもそもこんな考えなくちゃいけないのかしら。イライラしてきた。

「それを比企谷君に言う義理は無いよね？」

笑顔のまま、イラつきを表現する。

…『笑顔で苛つきを表現』っておかしい事を言っているのかもしれない。でも、私にとってはもう呼吸と同じくらい普通のこと。

これをやれば大抵の人は言う事を聞いてくれる。

「だったらなんですかさつきの人は面倒くさいので言いたいことがあるならさつきと言って下さいよ。ハチマンお家帰りたい。それとその不気味な仮面もやめて下さい」

あら容赦ない。

それにしても、さすが比企谷くんだよ。あれをやってもまだ突っ込んで聞いてくるなんて比企谷くらいだよ。

…でも今はそれを嬉しく思っている私がいる。

じゃあ…ちよつとだけ。

「…比企谷くん」

我儘言っても…いい、よね？

期待を込めた視線を目の前の青年に送る。

「はい」

あら嫌そうな顔。

「今度の日曜…h」

「暇じゃないでs」

食い気味に拒否される。

「ダウト」

「食われたら喰い返す…倍返しよ。」

…古い？こういうのはノリよ。

「……………負けました」

何に？

え？え？勝負だったの？

内心訳わからなくてテンパっているけど私は顔に出さない。…エリートですから。

片眼鏡は付けてないけどね！

「ふ、ふふん。じゃあ敗者の比企谷くんには今度の日曜に私とデートしてもらいます！」

ここまでできたら私の勝ちね。

…本当に何と戦ってるのかしら。

「所用の虫菌の治療があるので」

「ふふ♡私がドリルしてあげようか、比企谷くん？」

「たった今治りました」

多分、この時の私はこの日一番の笑顔だったと思う。

約束をしてから少しして、時計を見ると11時。終電もない時間だった。

幸い私も隣の彼もここから歩ける距離に住んでいるから、今は2人で酔い覚ましに夜の散歩をしている。

ふと隣から視線を感じた。見ると、比企谷くんがどこか納得してない顔をして私を見ている。

「どうしたの？」

逡巡する彼は、ゆっくりと、聞いてきた。

「えっと…あの、婚約者がいるのに俺と出掛けていいんですか？」

その質問は、いつもの皮肉じゃなくて私を心配してのものだと直ぐに分かった。

だから、伝えようと思う。

「…さつき比企谷くんはさ、私に、結婚したいのか？って聞いたよね？」

首肯する彼を確認して続ける。

「結婚は、したいよ。私も女の子だからね」

「…なら」

「でもね」

言わせない。

何故かは分からない。でも、彼の口からそれを聞きたくなかった。

「それは彼としたい訳でも、来年直ぐにしたい訳でもないの」
返事はない。

比企谷くんのことだから、きつとどう声を掛けようか悩んでいるん
だろう。

でも、同情は、そんなの要らない。

「だからさ、比企谷くん。…これから、宜しくね?」

3話／その時彼は、彼女は。

「だからさ…比企谷くん。これから、よろしくね?」

時間が時間だからか、それとも人影が少ないからなのか、2人で歩く音がいつもより大きく聞こえる。

目の前の彼は、少し笑みを浮かべると、溜め息をついた。

「やだっって言っても無駄なんですよね?」

無駄無駄。石化面付けちゃいたいくらい無駄。

「?よろしくね?」

「?やっ?と帰って?これだ」

太学徒歩30分の距離にあるアパートの一室で溜め息をつく。

あ?の後陽乃さんとは駅前で別れ、それぞれの家に戻った。

”家”か…あの千葉のマイホームではなく、この一室を家と呼ぶようになったのはいつからだろうか。

まあ4年間も過ごせばそう思っても仕方がないだろう。

こうして家離れをして大人になって行くんだなあ…

つまり何が言いたいかというと、

家離れはしても、小町離れはしませんってことだな。

ふと、昔言われたある言葉が頭に浮かんだ。

「お兄ちゃんは普段からどうしようもないこと言うけど、調子悪い時はさらにどうしようもないこと言うんだよ」

何故今思い出す?

少なくとも今は別に調子が悪いわけではない筈だ。

ならば何かをそれだけ気にしているということ。

一体何を気にしているのか。

理由はわかっている。…陽乃さんだ。

今日久々に再会した陽乃さんは、話しやすかった。

俺の捻くれた言葉に本当に楽しそうに笑っていた。

何より一緒にいて気を張らずに済んだ。

別に悪い事じゃない。

だが、
思い出せ。

比企谷八幡にとって雪ノ下陽乃とは、

そん

な人物だったか？

いや、違う。

比企谷八幡にとって雪ノ下陽乃とは雪ノ下雪乃の姉であり、リア充の王ことリア王であり、魔王だ。

今日感じたような人物ではない。

では、今日会ったのは本当に「雪ノ下陽乃」か？

その問いは難しい。

雪ノ下陽乃という人物は、常に強固な強化外骨格を身に付けている。

俺は雪ノ下陽乃の内側を知る人間ではない。

そんな人間が彼女の中身を勝手に想像し、決めつける？

なんと傲慢なことか。

俺が犯す大罪は怠惰だけで十分だ。

目指せ精霊王ハーレクイン。

だが、そんな俺でも1つ言えることがある。

以前小町が俺の真似をして言っていたことを思い出したのだ。

なんか俺さつきから小町ばっかだな。今度電話しよ。

…じゃなかった。こう言っていた。

「往々にして個性個性言ってる奴に限って個性がねえんだ。だいたいちよつとやそつとで変わるものが個性なわけあるかよ」

…やだ汚い言葉使い。親の顔が見たいわ。

まあそれは置いといて。

陽乃さんは変わっていた。

少なくとも、俺の知っている陽乃さんとは違っていた。

だとすると。

俺の持論（c v : 小町）の言に従うなら。

…ちよつとやそつとじやないことが陽乃さんには起きているのか。それは…なんだ？

結婚の話は以前からあつた筈だ。

だからそれが主な理由ではないと思われる。

……………。

…考えても仕方がない。

陽乃さんが、変わるほどの出来事。

きつとそれは、

俺には想像もつかない事なのだろう。

だから考えない。

俺は省エネを決意したんだ。

誰の言葉だったか。

「やらなくてもいいことは、やらない。

やらなきゃいけないことは、手短に」

「…ふう、やっと帰ってこれたなあ」

千葉の実家…実家って言うのも変な気分ね。

千葉の私の部屋と同じくらいの大きさの部屋。

リビングのライトではなく、リビングの隅に置いてある照明の電気を入れる。

ぼんやりとした薄紅色の光が顔を照らす。

実は2週間くらい前にはここに着いていたから、もう家具やらなんやらは揃っている。

お気に入りはソファー。

柔らかすぎず、固すぎない、この固さが癖になるのよね。

そのソファーに横になる。

千葉にいた時は帰ったままの格好でこんな事はしなかったんだけど。

なんかいつかなくなつて思つちやつてる私がいる。

おおらかな気分になつてる。

これが北海道の空気なのかな…さすが北海道、でっかいどう！
違った、酔ってるだけかも。
こんなに飲んじやうなんて。
自分の酒量は把握している。
飲み過ぎた事なんてない。
やっぱり緊張してたのかな。
私の知らない場所、人達だったから。
きつと、「雪ノ下」陽乃ならこんな事はなんともない。
でも、
：「私」はもう違うのよ。

私は、もう強くなってるのだから。

ただ、私が「雪ノ下」陽乃であったという事実が私を逃さない。
だから、私は救いを求めながら、救いを拒むのだ。
欲しいのは支えであって、救いではない。
救ってもらおうような、弱い人間にはなりたくない。
そんなプライドが、助けの手を拒む。
面倒くさい女よね。うん、自覚してる。

だから…

「君は…」

「私を支えてくれるかな」

薄暗い部屋の中、これから関わっていくであろう年下の男の子に思
いを馳せる。

さて、メールを送ろう。

いつ遊びに行こうかな。
なんで書き出せばいいのか。
前みたいに強引にいかうか。

いやこの文はないな。
やっぱり素直に誘おう。
よしこの文なら大丈夫。

「送信」

そのボタンをタップした後、比企谷八幡は呟いた。
『『やらないやいけないことは、手短に』だからな』

4話／もう一つの再会

ところで、春にはいろんなことが始まる。

千葉のカマクラは安楽地^{コタツ}を離れ、冬眠から目覚めたチーバくんは大きな伸びをし、魔王も千葉からやって来るし、村人Aは犠牲になる。あの後輩と再会したのは、そういうことが関係しているのかもしれないし、全然関係ないかもしれない。

………関係ないな。あつてたまるか。

◇◇◇

とにかく、魔王と遭遇する少し前、春休みの俺は札幌市某店で小悪魔に出会った。

北海道というこの地にやって来てはや四年。

一年の時から始めたバイトは、意外にも続いている。

敢えて大手を避けて地元チェーンにしたのが良かったのかもしれない。

しかし、まあ、アレだ。

四年もバイトを続けていたからか、気付いたら店長から他のバイトの指導的な立場にされていた。

ふざけんな、それ俺の仕事じゃねえよ！

…とは思いつつも通帳の数字が増えているのを見ると断れない。

あゝ哀しきかな、これも人間の性だ。

「へい比企谷くん、今日から新しい子入るからヨロシク！」

「何ですかそのテンション。やめて下さい辞めますよ」

「斬新な脅しだねえ…いや、すまないね、新人のバイトの子の面倒、見てもらえるかな。給料には反映しとくから」

これが店長。コレが……

いや、不満な訳じゃない。不安なだけ。

労働を給料にちゃんと反映してくれるあたりいい人ではある。

ただこの人と話していると俺の堪忍袋にダメージがな。

「…時給＋150円で手を打ちましょう」

「乗った！…よし、じゃあ紹介するよ。こちらが新しく入った一色さん、一色いろはさんだ」

…割に合わねえ。

◇◇◇

店長に連れられてスタッフルームに入ってきた新人は、おかしな敬語を俺に使った。

「これからお世話になってあげます、一色いろはです」

新人バイトは一色いろはと名乗った。

「よろしくお願いします」

一色は最後に『よろしく』というところにアクセントをつけて言う。逃がしませんよ、という言葉が瞬間脳裏に張り付いた気がする。

いろはすこわい。

「…比企谷と申します」

比企谷と名乗ったその男は、挙動が全体的に不審な感じで、過剰にへり下るような態度を取った。

敬語とか新人の小悪魔系後輩バイトとか、もつと言うと社会そのものを苦手としているような男の姿が其処にはあった。

…っていうか、俺だった。

「うわっ…どうしたんですかなんで敬語なんですかもしかして本州からわざわざ先輩を追っかけてきた健気な美少女にときめいて動揺し

「ちゃったんですかもつと男らしくやり直して下さいいごめんなさい」
「久しぶりに聞いたなそれ…」

久々だというのに容赦がない後輩だ。別にダメージなんてないけど。……ほろり。

いやこれは涙じゃない。流した数だけ強くなれないから。

坂井さんも言ってるだろ。

それは兎も角：アスファルトに咲いてる花って、大抵雑草なんだよなあ…。

そのセイヨウタンポポ率は異常。

◇◇◇

意外にも、一色は真面目に仕事をした。

時間5分前には準備を終え、素早くレジを打ち、イレギュラーな客にも愛想よく対応した。

…いや、意外でもないか。一色はあの頃と同じように一色らしく仕事をこなした。

それだけだ。

一色は休憩時間になると、わざわざ人の少ない倉庫の方にある俺のレストプレイス（ベストではない。何故なら段ボールが所狭しと置いてある）へやってきた。

しかし、特に話しかけて来ることはなかった。

時折話しかけようというそぶりは見せるものの、すぐに口を噤んで俺の隣に座るだけ。

…アツちよつと一色さん近いです、あ——っ！困ります一色さん困ります!!あ——っ!!

◇◇◇

そして時は流れ、春休み終了3日前からはぐーたらする為に休みを入れてる俺が（フルタイムで）出勤する最後の日、一色はいつものように俺の隣に座り込むと、不意に口を開いた。

「先輩。先輩の名前ってなんていうんですっけ」
「……は？」

正直、今日は何か言っただけで来るのではないかとは思ってはいた。
だが忘れていた。

一色が俺の推測なんぞ超えて来ることは明確で、明晰で、明瞭で、明白だという、そんな簡単な事を。

こいつは他の誰でもない一色いろはなのだ。

「…比企谷だよ。忘れたのかよ。病院行くか？」

若年性健忘症こわい。

「いやいや、先輩、ちゃんと私の話聞いてます？名前ですよ。な、ま、え！」

一色はため息をつきながら人差し指を左右に振る。

俺の堪忍袋が小破。

…頭にきました。

一色は続けて言う。

「因みにですね、私は”いろは”って言うんです」

うんうんそうか。

「言ってみろよ。わざわざ事前申告しないでいいから」

おかしな奴だな。

「いろは〜っ！って違います！馬鹿なんですか先輩は馬鹿ですね！」

疑問系かと思ったら断定だった。
全くこれだから先輩は、と、

「先輩の下の名前ですよ下の！」

…ああ。いや、そうだろうとは思ってたけど。
ど。

「八幡だよ…お前忘れたのか？」

「まさか、忘れるわけじゃないですか」

…即答だった。しかも真顔で言い放った。

いや、なら何故聞いた!!

『いや、なら何故聞いた！』みたいな顔してますね、は・ち・ま・ん
幻聴だろうか、「ん」の後にハートが付いていたような気がする。

「やめろ一色、鳥肌立った。いやお前熱でもあるのか？本当に病院行くか？」

「私は、いろはですよ」

彼女は笑ってそれだけ言った。